

色彩が奏でる 芸術と科学

知と感性の次なるブレークスルーを目指して

日時= 2014年10月11日[土]

会場= 国立新美術館 東京都港区六本木7-22-2
<http://www.nact.jp>

本シンポジウムは、美学と科学の両面から色彩の研究手法を開拓した、故・小林光夫氏（電気通信大学名誉教授、元日本色彩学会会長・関東支部長、元国立新美術館客員研究員）の、絵画の中の色彩の意味を探る眼差しを広く共有すべく企画しました。画布の上に響く色彩を聴き、人間の営みに思いを馳せ、新たな気づきの扉を開く機会となることを期待しています。

【シンポジウム】 会場= 国立新美術館3階講堂 12:30 開場 / 13:00 開会

参加費=無料 事前申込=不要(定員260名)

第1部
「1枚の絵画をめぐる ～絵画の色を分析してみよう～」 13:10～14:00
第1部では絵画作品の色彩を通して芸術と科学の関係について考える。絵画の画面上では色は色として存在するのではなく、一つの作品の要素として互いに関係し合いながら存在する。ゴッホの筆致の強さ、レンブラントの明暗の静謐さ…、絵画作品に隠された色彩の秘密を美学、美術史、色彩学、そしてデジタル画像処理の手法を使って、ときほぐしてみよう。
話者 栗野由美(東京造形大学)、鈴木卓治(国立歴史民俗博物館)、室屋泰三(国立新美術館)

講演I 「体性感覚の〈様相〉と〈クオリア〉— 芸術学と色彩研究」前田富士男(中部大学)
コメンテーター 栗野由美(東京造形大学)、坂田勝亮(女子美術大学)
14:10～15:10
色彩の研究は、物理学や化学の専門領域をふくめても基本的に、視覚をめぐる感覚・知覚の探究と認識されている。だが、そうした基本的な知識をひとまずカッコに入れてみてもよい。橙や青を指して暖色、寒色と呼ぶ。しかし、寒・暖の感覚とは本来、皮膚感覚、触覚に起因する。寒・暖とは、視覚とは異なる体性感覚の重要なモダリティー(様相)にほかならない。芸術学の立場から、色彩のクオリアと様相を考察してみよう。

第2部
「芸術、科学、色彩」
講演II 「美術絵画のデジタルアーカイビング」 富永昌治(千葉大学大学院)
コメンテーター 大住雅之(オフィス・カラーサイエンス)、岡嶋克典(横浜国立大学大学院)
15:20～16:20
デジタルアーカイビングは、貴重な絵画作品をデジタル画像として記録・保存し、映像として次世代に受け渡すことを本来の目的とする。ここで人が絵画作品を鑑賞する際の視環境を考慮する必要がある。一般に画像の見えは撮影時の照明光源や視点に依存し、自由な視環境で絵画作品のリアルな映像を楽しむことができない。本講演では、照明や視点に依存しないデジタルアーカイビングの考え方とそれを実現する方法を展開する。

総合討論 16:30～17:00 司会:北島耀(文化学園大学名誉教授)

【資料展示】 シュヴルール稀観本の紹介 印象派画家から「色のバイブル」と呼ばれたシュヴルール(Michel-Eugène Chevreul, 1786-1889)の色彩体系:1855年パリ万博最高賞受賞豪華本を展示します。
■解説:北島耀

【ワークショップ】 会場= 国立新美術館3階研修室 参加費= 無料

ひみつのレシピ
～ひりつスタンプ
栗野由美+ミルクラ
(東京造形大学ゼミ)
開催時間= ①10:30～12:00、②13:00～14:30、③15:00～16:30(各回定員15名、30分程度)
※②③の回は研修室内でシンポジウム会場の中継上映する予定です。
申し込み方法= 参加希望回、参加者氏名を記入のうえ、10月7日(火)までに、
< workshop @ sigci.sakura.ne.jp >宛に電子メールでお申し込みください。

名画に使われた色のリストと量的比率から、自分の身体を使ってオリジナルの絵を創作し、色の集まりについて考えるワークショップです。
年齢問わず、どなたでも参加できます。

共催= 国立新美術館、日本色彩学会

企画・運営= シンポジウム実行委員会(国立新美術館、日本色彩学会 関東支部・イノベーション研究会・画像色彩研究会・視覚情報基礎研究会・色覚研究会・測色研究会)

協力= 日本色彩学会 白色度研究会・パーソナルカラー研究会

問合せ= 日本色彩学会 関東支部事務局気付 シンポジウム実行委員会 e-mail: kanto@color-science.jp 最新情報は日本色彩学会HPをご覧ください。 <http://www.color-science.jp/>

Design: KASUGAMARU